

2023 年度
学長教育改革研究助成金・学長研究助成金
成果報告集



東北学院大学

目 次

1. 成果報告集刊行にあたって	1
2. 学長教育改革研究助成金・学長研究助成金の概要について	2
3. 2023年度採択課題一覧	4
4. 成果報告	5
(1) 学長教育改革研究助成金 東北学院大学でのプロンプトエンジニアリングの利活用-生成系AIを教職協働で 学び合い・実装へ- (研究代表者：高等教育開発室長 中村教博 教授)	
(2) 学長研究助成金 (教育職員) 民族芸能を通じた離散コミュニティにおける住民ネットワークの再構築 (研究代表者：文学部歴史学科 金子祥之 准教授)	
(3) 学長研究助成金 (職員業務研究) 五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査 (研究代表者：情報システム部情報システム課 平間崇晃 課員)	
※所属、役職は2023年5月の申請時点のものであり、2024年4月の本報告集発行 時点とは異なります。	
5. 終わりに	23
6. 参考：研究成果報告会について	24

1. 成果報告集刊行にあたって

東北学院大学における「学長研究助成金」は、2011年3月11日に発災した東日本大震災からの復旧、復興に関わる学部横断的な研究又は知的支援活動を支援することを目的に、教員を対象として2012年度に始まった本学独自の助成金制度です。この「学長研究助成金」は、その後、研究対象を東日本大震災から地域が抱える課題へと拡大いたしました。また2014年度には、各事務部署が抱える課題を解決することを目的とし、職員を対象とした「職員業務研究」助成金制度、さらに2016年度には本学の教育の一層の改善を目指し、現在の教育・研究における課題や大学全体の問題を解決することを目的とし、教員を対象とした「学長教育改革研究助成金」制度として拡充してきております。

これらの助成金制度については、これまで「学長研究助成金（教育職員）」では12年間で47件、「学長研究助成金（職員業務研究）」では10年間で14件、そして「学長教育改革研究助成金」では8年間で14件が採択され、地域が抱える複雑な課題への対応や本学の教育、研究並びに業務全般の改善に対して大きく貢献していることと自負しております。

本成果報告集では、2023年度に採択された研究課題3件について、その概要と成果をまとめしております。ぜひ、多くの皆様にご高覧いただきたいと願っております。本学が有する知的資源を地域が抱える課題解決に活用するとともに、その過程で得られた知見を本学の教育・研究にフィードバックし、さらなる課題解決に活かしていくという循環を構築することを通して、地域に貢献する人材の育成を今後も続けてまいりたいと思います。

東北学院大学

学長 大西晴樹

2. 学長教育改革研究助成金・学長研究助成金の概要について

学長研究助成金は、2012年度に教員を対象として設置された研究支援制度であり、学部横断的な研究や知的活動の奨励・支援を目的に、複数の異なる学部で構成される教員の研究チームに対して活動や資金面等の支援を行うものです。当初は、2011年3月11日の東日本大震災からの復興などに関わる研究や知的活動をテーマとして、被災地の復興や防災教育等を対象テーマとしていました。この助成金を活用して得られた研究成果は、シンポジウム等の開催や学術誌の刊行によって公表され、教育・研究による地域貢献という観点から重要な制度となっています。

その後、2014年度には、大学の各事務部署に発生する問題や求められるニーズが多様化してきていることから、事務職員を対象とする「学長研究助成金（職員業務研究）」制度も増設しています。職員を対象とした制度では、事務職員が日ごろから問題視している関連業務や課題を研究するため、共通の問題を抱える事務職員の情報共有及び課題解決に向けた共同研究を実践する業務横断的な研究活動を支援し、事務部署間の連携を推進していくことを期待しています。

更に、2016年度には、大学を取り巻く状況に対応するための一環として、本学の教育・研究の喫緊の課題や大学全体の問題の解決を図ることを目的に「学長教育改革研究助成金」制度を設置しました。この研究成果は、教育・研究に還元され、人材育成への貢献がなされるとともに、本学の社会的プレゼンスの向上につながることも期待しています。

各助成金制度の概要の詳細は次ページを参照してください。

【学長教育改革研究助成金】

・テーマ：

2016 年度～2023 年度

『本学の教育改革に関わる研究又は問題解決活動』

・期待する効果：

- ①本学の教育・研究の更なる改革意欲を充実させ、本学の喫緊の課題や大学全体の問題解決を図り実施レベルに落とし込んだ問題解決提言を行う
- ②この研究活動によって、本学の教育・研究活動の充実に寄与する
- ③この研究活動によって、人材育成への貢献が期待され、東北学院大学のプレゼンスを向上させる

【学長研究助成金（教育職員）】

・テーマ：

2017 年度～2023 年度

『地域に関わる研究又は知的支援活動』

2012 年度～2016 年度

『震災・原発に関わる研究または知的支援活動』

・期待する効果：

- ①東北学院大学における地域に関わる創造的かつ領域横断的な知的活動を活性化化する
- ②この活動によって、地域・社会貢献に寄与する
- ③この活動によって、地域における東北学院大学のプレゼンスを向上させる

【学長研究助成金（職員業務研究）】

・テーマ：

2014 年度～2023 年度

『事務部署間の連携による課題解決』

・期待する効果：

- ①東北学院大学事務組織における横断的な課題解決活動を活性化する
- ②東北学院大学における SD 活動を活性化する
- ③東北学院大学職員の課題解決スキルを向上させる

3. 2023 年度採択課題一覧 ※所属・役職は申請（2023 年 5 月）時点のもの

【学長教育改革研究助成金】

No.	研究代表者	共同研究者	研究テーマ
1	高等教育開発室長 中村 教博 教授	①文学部教育学科 稲垣 忠 教授 ②工学部情報基盤工学科 志子田 有光 教授 ③人間科学部心理行動科学科 平野 幹雄 教授 ④高等教育開発室副室長 齋藤 涉 講師 ⑤教養教育センター 遠海 友紀 講師 ⑥ラーニング・コモンズ 嶋田 みのり 特任助教 ⑦学長室政策支援 IR 課 廣瀬 理行 課長補佐 ⑧総務部総務課 三浦 拓也 係長	東北学院大学でのプロンプトエンジニアリングの利活用ー生成系 AI を教職協働で学び合い・実装へー

【学長研究助成金（教育職員）】

No.	研究代表者	共同研究者	研究テーマ
1	文学部歴史学科 金子 祥之 准教授	①文学部歴史学科 政岡 伸洋 教授 ②文学部教育学科 松本 進乃助 助教授 ③地域総合学部地域コミュニティ学科 佐久間 政広 教授 ④東北学院大学 庄司 貴俊 非常勤講師 ⑤東北大学大学院教育学研究科 鷲谷 洋輔 准教授	民族芸能を通じた離散コミュニティにおける住民ネットワークの再構築

【学長研究助成金（職員業務研究）】

No.	研究代表者	共同研究者	研究テーマ
1	情報システム部情報システム課 平間 崇晃 課員	①総務部総務課 安達 高明 参与 ②総務部総務課 小出 佳祐 係長 ③学生部学生課 菅原 康子 課長補佐 ④学生部学生課 長谷川 貴希 課員	五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査

4. 成果報告

【学長教育改革研究助成金】

(1) 東北学院大学でのプロンプトエンジニアリングの利活用ー生成系 AI を教職協働で学び合い・実装へー

研究代表者：高等教育開発室長	中村教博	教授
共同研究者：文学部教育学科	稲垣忠	教授
工学部情報基盤工学科	志子田有光	教授
人間科学部心理行動科学科	平野幹雄	教授
高等教育開発室副室長	齋藤渉	講師
教養教育センター	遠海友紀	講師
ラーニング・コモンズ	嶋田みのり	特任助教
学長室政策支援 IR 課	廣瀬理行	課長補佐
総務部総務課	三浦拓也	係長
研究協力者：工学部情報基盤工学科	淡野照義	教授
工学部情報基盤工学科	森島佑	講師

【研究の概要】

本研究では、東北学院大学の教職員が協働して有料版生成 AI (GPT-4) を活用する勉強会を開催し、生成 AI を大学組織に実装していくことを目的として、それぞれの日々の業務に生成 AI を利用する取り組みを行った。特に、大学2年生向けの選択必修授業「データ活用による探究」を開発して、全国でも例のない文科系中心の総合大学において生成 AI の利用を基礎から学び、自分自身で応用できる教材が作成できたことは大きな成果である。

1. 研究の背景と目的

生成系 AI の大学業務や高等教育での活用は、さまざまな問題を抱えているものの、大学関係者が積極的に良い利用方法や新しい利活用システムを見出していくことは、今後の大学教育や運営にとって必須である。現状では大学内の事務業務も含めて、大学全体で行っている例はあまり見られていないために、この研究を通じて生成 AI の実践例を取りまとめた。

2. 研究の方法

研究代表者、共同研究者が有料版生成 AI に加入し、それぞれの立場での実践例を試行錯誤し、実践例を取りまとめた。

3. 結果と考察

a) 生成 AI の特徴、b) 有料版生成 AI の活用事例、c) 活用事例の共有、d) TG ベーシック科目の開発について外観する。a) について、東北学院大学・教育総合研究所報告集第 24 集の 85-94 ページ「生成 AI 時代の高等教育の必要性」に取りまとめたので、そちらを参照いただきたい。b) の有料版生成 AI の活用事例について、高等学校の総合的な探求の時間における探求テーマのアイデア出しツールの開発事例、高等学校の情報 II 授業の推進事業例、

生成 AI を利用した小学校の授業計画案等に加え、大学生の生成 AI の活用実態調査や各種アンケート調査の自由記述欄の内容分析例について報告された。大学業務への生成 AI の適用事例についても検討されている。c)の活用事例の共有として、TG ベーシック科目リーディング&ライティングにおいて、生成 AI を積極的に利用することを指示して、小論文テーマのアイデア出しに利用することで、教員が受講生一人一人に対応しなくてもテーマを各受講生が独自に決められるという効果について、情報共有を行なった。d)の TG ベーシック科目の開発に関しては、「データ活用による探究」を森島講師が中心となって新規で開発した。この科目は 2024 年度から 2 年生後期の学生が選択必修で受講し、予想される受講者数は約 1600 名になる可能性がある。そのため、生成 AI の初学者でも学びを継続できるように、生成 AI の原理や基本的な使い方から文章データの取り扱いやデータ分析といった活用方法、さらには生成 AI を使った画像生成やアイデア出しといった応用例に至る生成 AI の利活用方法をオンデマンド教材で学べるように設計されている。この科目を受講することで生成 AI を使いこなせる力がつくように設計されている。

全国的には MDASH に関する AI 教育は実践されているものの、生成 AI に特化した科目ではない。本学の「データ活用による探究」科目では生成 AI に特化した科目であり、さらに文科系の学生でも受講できるようにアプリの使用法といった基礎的なところから習得できるように設計され、この科目を教養教育科目として全学展開している点は全国初の試みとなっている。文科系の学生が工学部の学生と協働することで、生成 AI を自由自在に使いこなす文系人材を輩出することにつながるだろう。

4. まとめ

本研究では、生成 AI の一つである有料版 Chat-GPT を有志である共同研究者で利用し、生成 AI 時代の高等教育の重要性と高等教育における生成 AI の活用事例を収集することを目的とした。生成 AI はインターネット上の大量の情報を学習しており、知識を伝達するような伝統的な講義型授業は生成 AI に任せ、今後の高等教育では生成 AI の回答から間違いを見つけたり、生成 AI を対話相手として英会話練習を実践するといった試行錯誤型の授業を実践していくことが大切であろう。さらに、本研究では「データ活用による探究」を開発し、2024 年後期に 2 年生の選択必修科目として全学展開することになっている。今後はインスティテュショナル・リサーチ(IR)で扱うデータを生成 AI を用いての分析や生成 AI を利用した東北学院大学の点検・評価報告書のデータ収集が行えるようなシステムを開発していくことで、本学の業務改善の前例を追求していきたい。

学長教育改革研究助成金

成果報告会 2024・3・29

東北学院大学でのプロンプトエンジニアリングの利活用
ー生成AIを教職協働で学び合い・実装へー

代表者：中村 教博

1

1. 研究組織と目的

	所 属	職	氏 名
研究代表者	高等教育開発室	教授	中 村 教 博
共同研究者	高等教育開発室	講師	齋藤 渉
	人間科学部心理行動科学科	教授	平野 幹雄
	工学部	教授	志子田 有光
	文学部教育学科	教授	稲垣 忠
	教養教育センター	講師	遠海 友紀
	ラーニング・commons	特任助教	嶋田 みのり
	政策支援IR課	課長補佐	廣瀬 理行
	総務課	課長補佐	三浦 拓也

- 1) GPT-4の特徴や潜在能力について参加者の理解を深める。
- 2) GPT-4を教育や研究活動、事務業務に適用する方法についての知識を共有する。
- 3) 参加者同士の情報共有やベストプラクティスの共有をし、相互の学びの場を提供する。
- 4) 高等教育のTGベーシックのリディング & ライティング科目や理数系科目、また初等中等教育を中心として、利活用事例を探究してその知見を全学的に共有する。また、高等教育開発室と政策支援IR室の業務である学内Institutional Research(IR)データの解析について、その効率化を図る。

2

2. 研究成果

研究助成による成果①

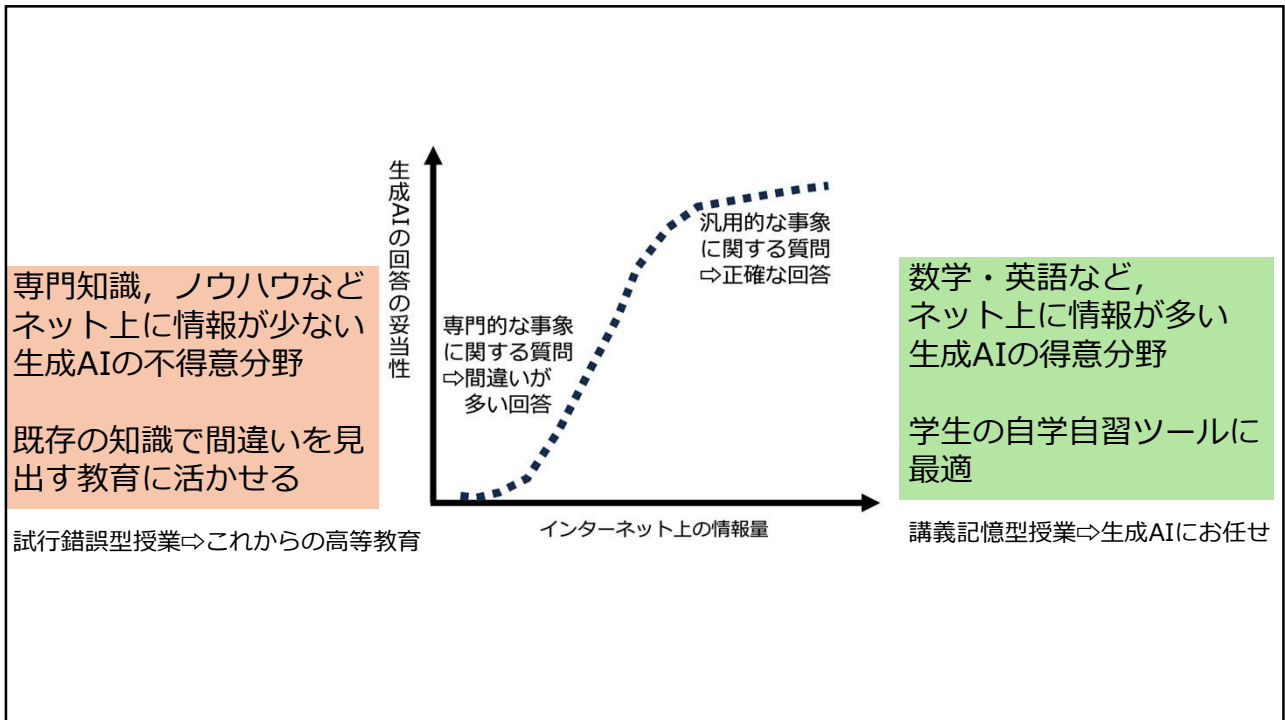


1. はじめに
2. 生成AIの動作原理
3. 生成Aiの得意領域と不得意領域
4. 高等教育における生成AI利用の具体例
 - 4-1. 講義の反転授業化
 - 4-2. 英会話練習
 - 4-3. 大学数学の練習問題
 - 4-4. ブレインストーミングと生成AI
5. 危険性
6. これからの方向性
7. まとめ

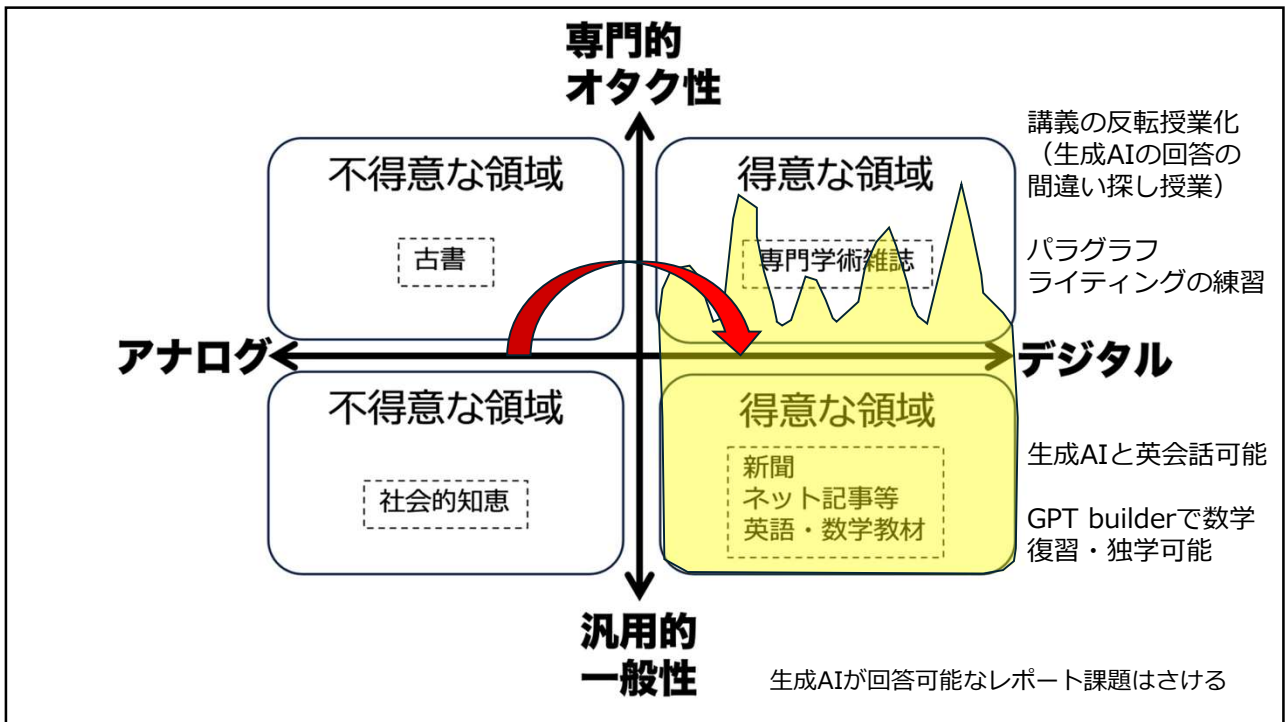
まずみんなで使ってみましょう！危険性も含めて、試行錯誤を重ねよう。

汎用的な業務は生成AIに任せ、新しい知を生み出すことに注力しましょ。

3



4



5

3. 4) シンポジウム・FD参加歴 研究助成による成果②

2023.12.21

東北学院大学における 生成AI活用科目の全学展開

AIMD 教育の水平展開と 最新 AI 技術の教育利活用シンポジウム
東北学院大学
森島 佑

数理・データサイエンス・AI教育強化拠点コンソーシアム
東北ブロックでの講演
by 森島先生

数理・データサイエンス・AI教育プログラム(MDASH)リテラシーレベル
多くの大学 全学必修 =>> 生成AIの活用を一部で紹介

教員の授業内で生成AIを活用した事例 多い

生成AIの使い方から
実践まで包括的な
授業実践ではない

森島先生の授業実践を土台 =>> 生成AI活用科目を教養教育科目として全学展開
全国初の試み

6

グループによる事例報告会

- 稲垣研究室 D1大沼さん R&W受講生への生成AIアンケート調査
- 稲垣先生 小学校でのデータ教育とAI, 生成AIによる探究授業のアイデア出しアプリ開発, 卒論生による生成AIを利用したつるかめ算の授業等
- 森島先生・志子田先生：データ活用による探究授業（80%が生成AIを利用）
- 齋藤先生：学修行動と学生生活実態調査にAI利用に関する設問
各種調査の自由記述欄の生成AIによる分類
- 廣瀬さん, 三浦さん：大学業務への生成AI適用

7

まとめ

- 有料版Chat-GPTを有志で利用し, 高等教育における生成AIの重要性について知見を得た(講義記憶型授業 ⇨ 試行錯誤型授業へ)
- 生成AIを利用した教養教育科目の開発ができ, 2024年度に開講を予定している(教員向けにも展開していく予定である)
- 研究計画・助成金の執行は計画通りに運ばなかった
- 来年度も継続させていただき, 未執行の計画を実施していきたい
- 学修行動と学生生活実態調査の生成AIに係る設問を分析し, 学生の生成AIへの意識を分析報告する

8

【学長研究助成金（教育職員）】

（１）民族芸能を通じた離散コミュニティにおける住民ネットワークの再構築

研究代表者：文学部歴史学科	金子祥之	准教授
共同研究者：文学部歴史学科	政岡伸洋	教授
文学部教育学科	松本進乃助	助教授
地域総合学部地域コミュニティ学科	佐久間政広	教授
東北学院大学	庄司貴俊	非常勤講師
東北大学大学院教育学研究科	鷲谷洋輔	准教授

【研究の概要】

本研究は、東日本大震災に起因する原発災害により、住み慣れた場所を離れざるを得なかった人びととの協働により行なう地域に関する研究である。震災から10年以上の時間が経過するなか、帰還困難区域や災害危険区域に指定された被災地では、「住む」という基本的な行為が制限された。それにより、地域コミュニティや、そこで育まれてきた地域文化を継承することが難しくなっている。

そこで本研究では、民俗学の視点を活かして、地域文化を核にコミュニティを支援してゆくための実践を行なった。本研究では地域文化として、祭礼や民俗芸能といった地域生活を行なううえで欠かすことができないハレの行事に注目した。そもそも、祭礼や芸能はどのような価値を地域でもっていたのか、その文化が震災によりいかなる困難を抱えているのか、基本的な理解を目指した。さらにこうした地域文化を、保存会を中心とする地域社会と、本学の学生たちも含めて実践し、コミュニティの維持・形成を支えるべく研究を実施した。

1. 研究目的

本研究の目的は、コミュニティの離散を強いられた居住禁止被災地域の住民ネットワークを、民俗学的な観点から再構築することにある。ここで祭礼・民俗芸能に注目するのは、『震災と芸能』において橋本裕之が指摘するように、津波被災地において祭礼や芸能が「失われた地域をそれでもつないでいくための最後の拠り所」（橋本2015：63）となったからである。だが、原発災害被災地では、過酷な現実がある。本研究で注目した民俗芸能である田植踊りに関して言えば、浜通りのそれは震災前の1割も継承されていない。最後の拠り所すら中断されたままである。

そこで、居住禁止被災地域にもかかわらず、民俗芸能の継承に積極的に取り組もうとする相双地方の2地区、加えて過去に大災害を経験し、現在もなお「負の記憶」を核に祭礼や芸能を行なう関西の1地区を研究対象とし、こうした人びとの生活実践に学びながら、祭礼や芸能の支援を通じて、住民ネットワークの再構築を目指してみたい。

こうした目的をもつ本研究の特徴は、3点に整理できる。第1に論文生産にとどまらない、被災者とともに歩む実践的な研究であること。第2に学生たちを研究補助者として明確に位置づけ、研究・教育のリンケージを図ること。第3に東北各県に残る民俗芸能は、その多くが担い手不足に悩んでおり、こうした課題に取り組むにあたってのヒントを提示し得ることである。

2. 研究方法

研究は、質的調査法によって進めた。具体的には、調査対象となる3地区ともに、聞き取り調査を軸としてフィールド調査を実施した。このうちメインのフィールドとなる浪江町南津島地区では、聞き取り調査に加えて、自ら芸能に取り組み身体を使ったフィールド調査も実施した。

研究組織はつぎのような構成をとった。研究代表者である金子が、メインのフィールドとなる浪江町南津島地区での調査を民俗学的な観点から担当した。松本進乃助氏（文学部教育学科）には音楽教育の観点から、鷺谷洋輔氏（東北大学大学院教育学研究科）には身体論の観点からこの調査に加わっていただいた。また増藤雄大（アジア文化史専攻）ほか学生33名が、裏方作業も含めて民俗芸能に取り組んだ。

庄司貴俊氏（東北文化研究所客員研究員）は、浪江町請戸の調査を社会学的な観点から担当した。政岡伸洋氏（文学部歴史学科）は、和歌山県白浜町の富田の津波警告板と神社祭礼の調査を担当した。そして佐久間政広氏（地域総合学部地域コミュニティ学科）に、メンターとして研究全体に対してアドバイスをいただいた。

3. 活動と実施

まず、南津島郷土芸術保存会との連携活動としては、「常磐線舞台芸術祭」、「標葉祭り」、「肉祭り」、「芸能がつむぐ地域の未来—秋保と南津島の田植踊り」、「食べて応援しよう in 仙台 2024」といった震災復興や民俗芸能関係のイベントに、保存会をサポートして参加した。これに参加するにあたっては、事前の交流会も実施し練習を重ねるとともに、練習や交流の機会を通じて聞き取り調査を実施した。また、「芸能がつむぐ地域の未来—秋保と南津島の田植踊り」「福島県地域振興課報告会」「民俗芸能学会第197回研究会」といった学術交流の場で、学生たちと共に成果報告を行なった。

また、庄司氏の請戸調査は6回、政岡氏の白浜調査は2回実施していただいた。それぞれ基礎的な調査を進めてくださり、現在、論文化を目指し文章化を進めている。内部研究会は7月と3月、2度実施した。付言すると、「標葉祭り」と「肉祭り」は、帰還困難区域が一部解除になり初めての津島地区でのイベントであった。実際に話をお聞きしていた現地に足を運ぶことができ、貴重な経験となった。

4. 結論

申請時に掲げていたように、今年度はまず、連携先である南津島郷土芸術保存会の関係を深め、芸能や地域についての基本的な理解を深めることに時間を割いた。すなわち、この1年間の活動のねらいは、基礎調査の徹底にあり、それを一定程度進めることが出来た。またこのプロセスを通じて、保存会の活動を支えることのできるサポーターを多く養成することができ、保存会の活動をより持続的なものとするのができたと考えている。

もっとも本研究が取り組む、コミュニティの離散を強いられた人びとのネットワークを再構築する試みは、到底1年では完結するものではない。今後も継続的な取り組みが必要である。これまでの活動を通じて得られた調査研究の成果を用いて、いまだ帰還することのできない多くの人びとに地域を感じていただけるような機会を設けたい。また、より多くの人びとに浜通りの歴史と文化の魅力とリーチする活動を展開する必要がある。こうした学術的な視点を活かした活動は、芸能をサポートするボランティアにとどまらない、学問ならではの地域貢献のあり方であると考えている。

東北学院学長研究助成

民俗芸能を通じた 離散コミュニティにおける 住民ネットワークの再構築

研究代表：金子祥之



1

研究の目的

本研究の目的は、コミュニティの離散を強いられた<居住禁止被災地域>の住民ネットワークを、民俗学的な観点から再構築することにある。

被災者の拠りどころとしての祭礼・民俗芸能に注目し、本学の学生を巻き込みながら、人びとのネットワークの再形成を支援する地域貢献型の実践研究を行なう。

2

津島の田植踊

- 種まき→田植え→稲刈り→稲こき→するす→唐箕ふきと、**農作業**を再現し、五穀豊穡を祈る
- 福島県重要無形民俗文化財・国選択無形民俗文化財の指定
- 南津島のほか、上津島、下津島、赤字木の4集落に伝承されてきた。しかし震災により、南津島を除いて、中断状況が続く

3

山積する課題

- 人的資源の問題
被災による担い手の減少。会員の固定化・高齢化。
避難先から集っての活動。舞手がそろわない
 - 場所の喪失による問題
練習場所・保管場所・奉納の機会
- ☞ 学生たちも協力しながら、**保存会を支援する**

4

2023

7月

- 16日：「常磐線舞台芸術祭」に向け練習会
- 31日：「常磐線舞台芸術祭」 学生一同で出演

8月

- 25-27日：夏合宿 保存会の方々と練習会

10月

- 15日：「^{しねは}標葉祭り」・「肉祭り」に向け練習会
- 22日：「標葉祭り」 保存会の方々と出演
出演学生→ささら：2， 早乙女：4， 笛：1

11月

- 5日：「肉祭り」 保存会の方々と出演
出演学生→ささら：2， 早乙女：3， 笛：2， 太鼓打ち：1

12月

- 2-3日：「芸能がつむぐ地域の未来—秋保と南津島の田植踊り」
保存会（神楽）， 学生一同（田植踊り）参加
- 19日：「田楽」研修会（民俗芸能を継承するふくしまの会）

活動場所

- 岳下住民センター
- 津島活性化センター
- 二本松市市民交流センター
- 仙台市

5

2024

1月

- 20-21日：神楽練習

2月

- 16日：内堀知事を訪問し活動報告
- 17日：県地域振興課の成果報告会
被災地の民俗芸能調査研修（民俗芸能を継承するふくしまの会）
- 18日：請戸・荻野神社安波祭（請戸田植踊保存会との交流）
- 25日：神楽練習

3月

- 10日：「食べて応援in仙台2024」に向けて練習会
- 16日：民俗芸能学会で活動報告@早稲田大学演劇博物館
- 17日：「食べて応援in仙台2024」
出演学生→ささら：1， 早乙女：3， 笛：2， 神楽：2

活動場所

- 浪江町
- 二本松市市民交流センター
- 福島市
- 仙台市

6

4種の活動内容

➤助っ人活動

学生たちが協力することにより、田植踊を披露

➤PR活動

学生たちだけで田植踊を披露し、津島地区をPR

➤他の芸能保存会との交流

➤学術団体・行政機関等での研究報告

7

成果

➤私たちと保存会の信頼関係が深まり、また保存会内の関係性もより良好になった。

➤活動内容が「踊る」だけにおわらず、芸能の理解を深める方向に広がりを持ち始めた。

☞地域外の人にとっては、芸能の意味が理解できない。学生たちが翻訳して展示や解説に!!

☞さらに研究報告につなげた

8

【学長研究助成金（職員業務研究）】

（1）五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査

研究代表者：情報システム部情報システム課	平間崇晃	課員
共同研究者：総務部総務課	安達高明	参与
総務部総務課	小出佳祐	係長
学生部学生課	菅原康子	課長補佐
学生部学生課	長谷川貴希	課員

【研究の概要】

本研究は、五橋キャンパス開学を機に発生した昼食難民学生に対し、適切な食事環境整備をするために開始した。はじめに、何が問題で昼食を食べることができないのか理由が不明なため本学の食環境について調査を行い、現状の問題点やネックになっている部分を洗い出した。次に、問題点・課題を踏まえ学外視察等を行い、参考事例や相違点について調査をした。最後に、各視察で参考になる事例を短期・中期・長期の視点で分類し最適と思われる食事環境について、解決法を複数立案し、その内のひとつを実証実験として実施した。

実証実験では一定の有効性を検証できたが、食事環境整備においては複数かつ長期的な観点で取り組んでいく必要があり、一過性のプロジェクトで終わらせないことが重要である。

1. 研究の背景と目的

2023年4月より東北学院大学五橋キャンパスが開学した。開学により土樋キャンパス・五橋キャンパスに11,000名の学生が集うことになったが、食事を希望する学生が学内の飲食施設や食事販売場所では間に合わず、溢れかえる事態が発生した。学内の状況を見ると学生食堂は混雑し、食事可能場所が分からないためか食事禁止エリアでも食事をする姿が見られた。これらから本学の食事環境が最適とは言えないことが察せられる。そのため、実際の食事環境を調査し、数字等のデータを基に「食事をしたい学生全員、一人の学生も迷うことなく食事を摂れる環境」を目指すべく本研究が始まった。

2. 研究方法

本研究では、目指すべき姿へ向け学生の食環境の把握、問題点の整理の観点、学外での先行事例の確認や問題点、本学における解決策・対応策の有効性の確認を取るため下記の方法で研究を行った。

①学生調査

本学の食事環境の現状を把握するため学生調査を行い、本学の問題点・課題を整理する。

②学外視察

他大学の食事環境の整備状況や現在抱えている課題などを確認調査し、本学の課題解決または食環境充実へ向けての施策を策定する。

③実証実験

学外視察を踏まえ、立案した施策の有効性を確認するために試行運用を実施する。

3. 研究結果

①学生調査

学生調査では、本学学生 11,121 名中 1,039 名の学生がアンケートに回答した。そこでは、昼食を食べるのを諦めたことがある学生は 63%に上り、食事環境に問題があることが明らかになった。食べられない理由としては「混雑している」と言う回答が多くを占めていた。また、周囲には飲食店もあるが、授業開始に間に合いやすく、低コストで済む学内飲食を利用する声が多く、混雑の要因は特定の「食事購入場所」「食事場所」「食事時間」であることが判明した。このことから、これらの要因を分散させることを解決策の軸として学外視察を行った。

②学外視察

学外視察は、本学の食事環境の課題である分散の観点で実施した。他大学では、ゾーニングエリアの設定や、キャッシュレス会計、お弁当の分散販売や販売場所の選定、販売データの分析等、学生の食事環境整備に対し積極的に取り組んでいた。各参考事例をもとに、本学の環境に合う施策を策定した。

③実証実験

策定した施策の中から、取り組みやすい低コスト、または工夫で改善できる効果が期待できるものの実証実験を行った。食堂の一部を一定時間食事専用とする食事専用エリアを設定することで、座席を確保しやすくした。2023年12月に実施した際は利用者の76.1%から「便利になった」「やや便利になった」と高評価を得た。自由記述欄から得た指摘事項を改善し、2024年1月に再度実証実験を行った際には、席の確保のしやすさは2023年12月実施の76.1%から92%に上がり、自由記述欄にも以前のような指摘はなくなり有効性を確認できた。

4. 本研究の今後の課題と展開

本研究では、学生の食事環境の観点で調査や分析、学外視察や実証実験を実施した。調査の結果、昼食を希望するが摂れない学生が実際に発生していることが分かった。視察により、他大学は学生が食事を摂れない状況に危機感を感じており、学生を迎え入れる上で最重要課題として取り組んでいることが分かった。本学では生じている問題と有効な手立てが見つかっていない状況にあったが、本研究により解決につながる糸口を発見することができた。実証実験によりその有効性も検証でき、今後の継続した施策実施が期待される。一過性のプロジェクトに留めず、長期的な計画（TGGV150）等に盛り込むなど学生支援充実の一環として取り込むことも有効である。



東北学院大学

東北学院大学 2023年度学長研究助成金（事務職員業務研究）

「五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査」

研究代表者：情報システム部情報システム課 平間崇晃
共同研究者：総務部総務課 安達高明
総務部総務課 小出佳祐
学生部学生課 菅原康子
学生部学生課 長谷川貴希

1

東北学院大学

「五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査」

研究背景

2023年4月より東北学院大学五橋キャンパスが開学。
しかし、昼休みの1時間で数千人が食を求めため食堂・コンビニへ
学生が殺到する事態に。

【学内外の状況】
学生食堂やコンビニ等は混雑・行列
ラウンジの食事利用で席が埋まる・食事禁止エリアでの飲食
学生の食に対する客観的な情報不足

➡ これらの状況から
本学の食事環境が最適ではない可能性

➡ データ・数字を基に「食事をしたい学生全員、一人の学
生も迷うことなく食事を摂れる環境へ」を目指す。
食環境に対する前例なき研究開始を決意



2

Phase1

目的
仮説設定

研究目的

学生の昼休みの行動を調査し、現状の問題を把握し、
調査結果をまとめ有効な手段を探る。

「東北学院大学生は昼食で困っている」といっても主観によるものになり、そうであってもどんな行動や原因、傾向があるかも分からない。
現状が分からなければ、施策立案が出来ないため、現状調査をし、問題点を洗い出し、その根源を調査分析し、東北学院大学昼食行動における施策を立案する。

➡ 「そもそも昼食が取れない時があったのか」
「なにが原因で昼食を取れていないのか」を分析する必要がある。

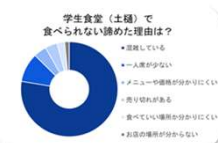
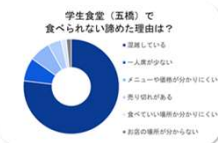
➡ 学生調査を実施

3

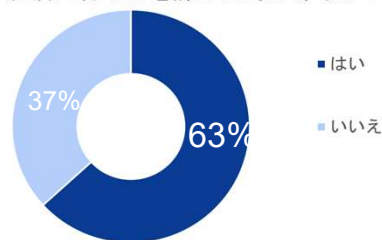
Phase2

学生調査

総回答学生数
1039名



何らかの理由で昼食を食べられない時、行き
たいお店に行くのを諦めた時があるか？



東北学院大学生の食状況

- ・ 利用金額301円～500円が回答者数の学生数の半数を占めている
- ・ 移動が楽な学内で食べたい（学生食堂・大学生協・コンビニが上位）
- ・ 食事を諦めた経験のある学生は63%
- ・ 混雑が食べられない理由のNo.1
- ・ 飲食可能な場所がどうか分かりにくい・・・など

➡ 前提として時間割上、同時間帯に集中する上に移動が楽な（授業に戻りやすい）学内で食事をしたい学生が多く、安価に提供している学内食事購入場所・食事場所・昼休み時間帯に集中しているため、混雑が発生していることが問題。

4

Phase3

学外視察

学外視察目的

大規模大学の食事提供方法や食事場所、仕組みを学び
本学の課題解決ができる事例を見つける

視察大学

神奈川大学	みなとみらいキャンパス
関西大学	千里山キャンパス
近畿大学	東大阪キャンパス
関東学院大学	関内キャンパス

5

短期的解決法

低コストまたは工夫で改善できる効果が期待できるもの

ゾーニングエリアの設定（近畿大学を参考）

近畿大学では、食堂で購入した者しか入れない仕組みになっており、食事利用以外の学生が席を占有する状況を防いでいる。また食事専用スピード席（食事を早く済ませたい人向けの席）を設置し、全体の回転率を上げる仕組みを作っていた。

並んでいる間でのメニュー表示（神奈川大学・関西大学を参考）

神奈川大学では、毎日・毎週メニューが変わるという特徴もあり、サイネージでの表示を待ち列の途中に設置し見られるようにしていた。端末前で考え込む学生が減り、操作時間の短縮に成功した。

お弁当販売を動線上に乗せる（関西大学・関東学院大学を参考）

関西大学では、お弁当販売の場所を動線上にあることを確認し、販売をしている。
関東学院大学では、視察した10月末でも売れる場所を探っている。基本は動線上に乗せることが非常に重要で同じフロアでも動線上にのるだけで4倍売り上げが変わるというデータも。

飲食可能かの表示（神奈川大学・関東学院大学を参考）

神奈川大学では教室の入り口に、時間指定で「昼食利用できます」と正式に謳っている。
学生も「次の時間が教室利用されるかもしれない」と思いながら食事をする心配がない

食堂業者との打ち合わせ（神奈川大学を参考）

神奈川大学では月1回開催し、食事メニューやイベントの共有などし、連携している。

6

中期的解決法

コスト（人的・金銭的・承認）がかかるが、スムーズな動線や課題解決が期待できるもの

お弁当販売の分散販売（神奈川大学・関西大学・関東学院大学を参考）

神奈川大学では、お弁当販売を複数の講義フロアで販売しており、関西大学では学生が多く通る道にお弁当販売用ワゴンを出していた。関東学院大学では、複数個所で学生が通る動線上に昼の時間帯にお弁当販売をしていた。

五橋キャンパス地下スペース等の稼働・活用（関西大学・関東学院大学を参考）

関東学院大学では、展望スペースや中層階のラウンジスペースで食事が可能になっており、教室外も食事ができるようになっている。本学でも使いきれていない箇所も見えており、高層棟地下スペースが認知されていないためか昼食時間帯でも比較的余裕がある

エレベーターの停止しないフロア設定（神奈川大学・関東学院大学）

食事難民を直接的な行動ではないが、食事を購入できるまでの時間も食事を諦める理由のひとつと考える。神奈川大学では、低層階では止まらないよう工夫されている。それはそのフロアを利用するのであれば階段やエスカレーターを利用することとしている。

関東学院大学も同様に低層階は停止しないようにしている。両大学とも「全フロア、特に低層階での利用を許可すると本当に必要な高層階にいる人が使いづらくなるから」である。

7

結論

学生の食事環境整備は 大学の重要課題の一つである。

学生にとって食生活は、勉学や研究、スポーツ、日常生活のすべてにおいて必要な要素を占め、パフォーマンスに大きな差が生まれる。

他大学でも食事環境を重要視しており、取り組んでいる姿が見られた。

他大学においても学生を迎え入れる上で食事環境を重要視しており、取り組んでいる姿が見られ、本研究で解決に繋がる糸口を発見した。

しかし、一過性のプロジェクトではなく、その時の環境や需要・学校の指針に対応した学生の食事環境の継続整備が求められる。TGGV150に盛り込むなど学生支援の充実の一環として取り込むことも提言したい。

8

5. 終わりに

本学は、地域に根差し、地域とともに「ゆたかに学び 地域へ世界へ ～よく生きる心が育つ東北学院～」をモットーに教育、研究及び社会貢献の諸活動を推進しております。2023年度の研究課題においても、自然との共生を目指した地域の復旧、復興や震災の伝承等に関する研究、さらに、地域に貢献しうる人材として、現状と将来像をしっかりと認識し、自ら課題を発見し、解決策の立案、実践及び検証できる人材の育成方法の構築など、常に地域に目を向けた取組であると評価し、大学として採択いたしました。

本成果報告集をお読みいただきました皆様には、その一端をご理解いただけたものと考えております。本学では、学長教育改革研究助成金及び学長研究助成金に限らず、地域の発展のために本学が有する知的資源を活用し、また、その質を高めてまいる所存ですので、今後ともご指導、ご支援のほど、よろしく願いいたします。

東北学院大学 学長教育改革研究助成金・学長研究助成金 選考委員会

6. 参考：研究成果報告会について

○学長教育改革研究助成金・学長研究助成金成果報告会

- ・日時：2024年3月29日（金）13時00分～15時00分
- ・会場：土樋キャンパス5号館 第1・2会議室（Zoom併用）
- ・参加者：【役職者】

大西晴樹 学長、千葉智則 副学長（総務担当）、村野井仁 副学長（学務担当）、
中沢正利 副学長（点検・評価担当）、倉田洋 学長室長、渡邊義春 総務部長

【教育職員／事務職員】

教育職員 14名

事務職員 23名

・次第

1. 開会／黙祷

大西晴樹 学長 挨拶

2. 成果報告

①研究代表者：高等教育開発室長 中村教博 教授

「東北学院大学でのプロンプトエンジニアリングの利活用ー生成系 AI
教職協働で学び合い・実装へー」

②研究代表者：文学部歴史学科 金子祥之 准教授

「民俗芸能を通じた離散コミュニティにおける住民ネットワークの
再構築」

③研究代表者：情報システム部情報システム課 平間崇晃 課員

「五橋キャンパスにおける学生の食行動を中心とした昼休みの行動調査」

3. 講評

村野井仁 副学長（学務担当）

中沢正利 副学長（点検・評価担当）

渡邊義春 総務部長

4. 閉会

※報告時間は、各グループ25分（質疑応答5分を含む）とする。

2023 年度
学長教育改革研究助成金・学長研究助成金
成果報告集

編集・発行：東北学院大学

問い合わせ先：東北学院大学 政策支援 IR 課

〒980-8511 仙台市青葉区土樋 1-3-1

TEL. 022-264-6424 / FAX. 022-264-6364

E-Mail tgppo@mail.tohoku-gakuin.ac.jp